まちづくり情報帳の開発とその
市民評価DEVELOPMENT OF "COMMUNITY-
BASED PLANNING INFORMATION
BOOK" AND ITS EVALUATION BY THE
CITIZEN饗庭 伸 —*1 佐藤 滋 —*2
長谷川政敏 —*3 有地裕之 —*4Shin AIBA —*1 Shigeru SATOH —*2
Masatoshi HASEGAWA —*3 Hiroyuki ARICHI —*4キーワード：
参加型まちづくり, 情報の共有, 市民評価Keywords:
Community based planning, Information joint ownership, Citizen evaluation

This study reports fabrication technique of "community-based planning information book (CPIB)" which had developed as the database for citizens share the information in the Tsuruoka City, and its evaluation by the citizen. The features of CPIB are to correspond for "extent of the problem consciousness of the citizen" and "extent of the citizen's relationship to the community-based planning". The evaluation results shows the roles of 4types of citizens -the citizen type of "person with right" and "person receives lifelong learning" as the good reader of CPIB, and the "person aims building agreement" and "NPO staff" as the producer of CPIB.

1 研究の目的と方法

「まちづくり」の領域は曖昧であり、実際に「まちづくり」を掲げて市民参加の場を設けると、集まる人々の動機や興味は様々であり、それぞれの考える「まちづくり」も異なる。まちづくりの動機や興味は、各人が都市の課題を解釈することによって生まれ、それらが多様であるために「まちづくり」も多様なのである。参加型まちづくりとは、行政と市民側の主体が連携して、もしくは市民側の主体の意図を十分に汲み入れて行政が事業を行うことの総称である。いずれにせよ行政も含む複数の主体が関係を形成しつつ取り組むものであり、そのためには都市の課題の解釈を共有することが重要である。日本の市街地の空間的な課題は読みとりにくいため、多くの主体が解釈を共有することが難しく、このことが参加型まちづくりの成立を難しくしている。特に、地方都市の歴史的な基盤を持つ中心市街地のまちづくりにおいては、関連する主体も多く存在するためこの問題は顕著であり、課題の解釈を多くの主体が共有する手法が必要である。本研究は、このような手法として筆者らが96年より山形県鶴岡市において開発、実践を進めてきた「まちづくり情報帳（以下情報帳）」の作成技術を報告し、それに対する市民の評価を明らかにすることを目的とする。

このような手法の実践や研究は多く、本報告では、まず2において鶴岡のまちづくりの概要を述べた後に、既往の取り組みを整理し、鶴岡の特徴に対応させつつ情報帳の特徴を明らかにする。ついで3において情報帳の作成技術を報告し、4において、アンケート調査から得られた市民の評価を明らかにする。

2 まちづくり情報帳の特徴

(1) 鶴岡のまちづくりの概要

鶴岡市において情報帳を発行する背景となった政策上の課題は、中心市街地の活性化と、参加型まちづくりの取り組みの展開である。中心市街地は城下町を基盤とし、近代以降大規模な都市改造事業が実施されてこなかったため、城下町特有の街路形態が多く残り、その上に「景観形成基本計画（90年）」等に位置づけられた景観形成の事業等が実施されてきた。しかし、これらは民間の商店や住宅の開発に影響を与え、人口減少と高齢化、商業の地盤沈下といった現象にも歯止めをかける成果をあげるには至っていなかった。そのために目指されたのが、市民等を巻き込んだ「参加型まちづくり」の展開であり、筆者らが専門家として加わって96年より取り組みが始められた。

当初は市民側に「まちづくり」を掲げて活動する組織が無かったこともあり、行政からまちづくりの課題を示し、フィールドワークやデザインゲームなどの技法を積極的に取り入れた市民が参加し協議する場（以下協議の場）を設け、問題意識の共有、経験の蓄積、主体の掘り起こしをはかっていった。行政が示した課題は、「堰の整備」「官庁街の形成」「線引きの実施」等であるが、それぞれに個別的に協議の場が設けられ、筆者らは協議の場の運営を支援すると共に、必要な調査を行った。全体として、ある政策について構想を作成してから、個別対策を立案する、という整然とした進め方が組み立てられたのではなく、行政の各部署の判断、市民側の熟度などから規定される「機が熟した」課題から取り組むという進め方が取られた。そして、様々な課題について、協議の場における議論から

*1 東京都立大学工学研究科建築学専攻 助手・工修
(〒192-0397 八王子市南大沢1-1)

*2 早稲田大学理工学部建築学科 教授・工博

*3 鶴岡市建設部 参事

*4 鶴岡市建設部都市計画課 都市計画係長

*1 Research Assoc., Department of Architecture and Building Science, Graduate School of Engineering, Tokyo Metropolitan University, M. Eng.
*2 Prof., Department of Architecture, Faculty of Science and Engineering, Waseda University, Dr. Eng.

*3 Councillor, Construction Department, City of Tsuruoka

*4 Manager, City Planning Division, Construction Department, City of Tsuruoka

生み出された「解釈」、筆者らの調査の中から生み出された「解釈」が雑然と生み出される状況となり、これらの情報を蓄積し、複数の主体が共有する手法として開発されたのが情報帳である。

(2) 既往の取り組みの整理

複数の主体が情報を共有する手法の開発は古く、60年代末より80年代にかけて多く実践された「生活環境図集」「コミュニカルテ」と総称される取り組みが初期の完成された手法として特筆される^{註1)}。これらは地図をベースに各種の情報を集積するものであるが、データが羅列されているだけで解釈を共有しにくく、まちの将来イメージを生成しにくい、という問題が指摘されよう。これらの問題を克服するための以降の取り組みを見ると、①表現の方法の開発、②媒体の開発、③媒体を用いて主体が「解釈」を体験的に形成する技法の開発が取り組まれている。①については、地図やグラフなどに加えて、絵や言葉を論理的に組み合わせる情報が伝える方法が模索され、ボタンランゲージ理論を用いた取り組み等が展開された^{註2)}。②については、絵本や副読本などの開発が進められ、近年ではインターネットを活用した取り組みも多く見られる^{註3)}。③については、以上の媒体を用いたまち遊び、ガリバーマップ、タウントレイル、取材劇などが開発されてきた^{註4)}。これらの技法を用いて複数の主体が解釈を形成、共有しつつ絵本などの媒体を作成する取り組みも行われている^{註5)}。

(3) まちづくり情報帳の特徴

鶴岡の状況に以上の整理をあてはめると、情報帳はまちづくりの課題の協議の場を通じて形成された解釈をまとめ、媒体として発行する取り組みである。一方で、政策の意図は中心市街地の活性化に関連する課題について、段階的に協議の場を介して主体を掘り起こしつつ、具体的な方策を検討、実現していくことであった。したがって、情報の広がり、まちづくりに関わる主体とそれぞれの問題意識や取り組みの広がりを前提としており、情報帳は固定的な媒体ではなく、まちづくりの広がりにあわせて展開する媒体として構想された。さらに、その展開の過程で市民と情報帳の関わり方が多様化すること、つまり筆者らが情報帳を作成し、市民がそれを読む、という関係のみならず、完成した情報帳を用いて自主的な学習会を開催する、あるいは経験を積んだ市民自らが情報帳を作成する、といった、多様な関わり方を形成することが目指された。

このため、情報が蓄積されたところから段階的に発行していく方法を取り、さらに、市民側の主体が使いやすく作りやすい仕様をとった。このように、「主体の問題意識と取り組みの広がり（以下課題の広がり）」「主体の関わり方の広がり（以下関わり方の広がり）」を前提とし、現実のまちづくりのプロセスにあわせた仕組みとして構築されたことが情報帳の特徴である。これらの特徴を明らかにしつつ、情報帳の作成技術を次に述べる。

3 まちづくり情報帳の作成技術

(1) 全体の構成・概要

取り組みが始められたのは96年であるが、当初は情報収集に終らし、情報帳の発行は98年10月より順次進められている。都市計画課に常備して窓口で配布するほか、新しいまちづくりの課題についての協議の場や様々な説明会において市民に手渡されている。市広報などのPRにより窓口まで取りに来る市民も多く、これまで延べ

図1 まちづくり情報帳の構成

約600冊が発行されている。また、2001年6月に発行された都市計画マスタープランの計画文書の一部として位置づけられて発行されている。マスタープランはバインダー形式で、策定された文書が順次加除されるという形をとっている。情報帳の体裁もこの形に準じており、段階的な発行に対応したものとなっている。新たに増えた文書は郵送により市民の手元に届けられることになっており、市の名簿には216名が登録され、メンテナンスの対象となっている。

全体は、図1の通り構成されている。都市の課題を解釈したもののおさめられているのは「まちづくり情報編」であり、以下では「まちづくり情報編」について報告する。

(2) 一覧

これまで発行されたページの一覧を表1に示し、それぞれの、タイトル、ページ数、概要、論旨、発行時期、情報帳の内容のリソースとなった議論や調査についてまとめる。98年に最初の情報帳が発行され、以降「情報帳作成のための議論や調査」欄に示すとおり、調査や協議の場がまとまるたびに段階的に発行されている。扱うテーマは初期は景観形成に関するものが多く、後に商業振興、中心市街地活性化といったテーマのものが増える。

(3) 紙面の構成

各タイトルは2～4ページで完結する形をとった。(図2)一般的な市民が一息で読め、かつ市民側の主体が簡易に作成できる、ということを重視した分量である。また、多くの情報を入れるために図版を多用した。情報を羅列するものではなく「解釈」をまとめたものであり、表1の「論旨」欄にまとめたとおり説明的になることを避け、論文調、問題提起調とした。必然的に作成者の主張が盛り込まれるため、ページ右下に作成者の署名欄を設けた。現在は全てが専門家と市役所により作成されているが、当初より様々な主体が作成可能であることが市民に対して説明されている。

4 市民の評価

(1) 評価の概要

2で述べたとおり、情報帳は「課題」と「関わり方」の広がりを前提としていることが特徴であり、この点について情報帳を所持する市民の評価を調査した。具体的には、情報帳で扱う課題の広がりがそれぞれの問題意識と合致しているかという点（以下問題意識の一致）、各人が主体としてどのような形で情報帳と関わっているかという点（以下関わり方の一致）の2点についてアンケート調査を行った。

表1 まちづくり情報帳の一覧

no.	タイトル	ページ数	概要	論旨	発行時期	情報帳作成のための議論や調査	
						概要	実施年
1	都市の成り立ちを探る	4	鶴岡の都市設計手法を領域・基本軸・基本単位の三つに分けて分析し、以後の都市形成を江戸時代、明治時代、現代に分けて分析した。	中心商業地の衰退と郊外化、都市の南北軸の弱体化と東西軸の強化、城郭周辺のシンボル性が指摘される。	98年10月	大学研究室で自主研究として行った分析と、「第3学区のまちづくりを考える会 ^{注6)} 」で得られた情報を総合した。	96年
2	山の景観を楽しむ	2	鶴岡のまちの景観を特徴づけている山の景観を、山なみ景観と、沿道景観に分けて紹介した。	山の景観は、城下町の街路が持つダイナミックな空間の仕掛けであり、鶴岡らしさの象徴である。それらを尊重したまちづくりが求められる。	98年3月	大学研究室で自主研究として行った分析と、「第3学区のまちづくりを考える会 ^{注6)} 」で得られた情報を総合した。	96年
3	鶴岡らしい小空間を楽しむ	2	旧城下域に点在する、城下町時代の街路、木戸口、橋などの小空間の魅力をまとめた。	鶴岡の魅力は、山の壮大な景観と、城下町の頃から残る小空間の混在にある。	98年3月	大学研究室で自主研究として行った分析と、「第3学区のまちづくりを考える会」で得られた情報を総合した。	97年
4	自動車交通について考える	2	中心市街地（第3学区）の一部を対象にして行われた自動車交通量調査から、地区の交通特性をまとめた。	城下町時代の街路の形を多く残す歴史的市街地と自動車交通の共存が課題となっている。	98年3月	地区の交通量調査で得られた情報をまとめた。	96年
5	まちの危険な場所	2	地図を元に、まちの危険な場所についてまとめた。	危険だから近づかないという姿勢では本質的な解決にはならず、個別の原因を読み解き、考えていくことが必要である。	98年3月	「生活環境マップ／第三学区コミュニティ協議会」や「こどもきげんかしょマップ／鶴岡市」、「第3学区のまちづくりを考える会」などで得られた情報を総合した。	97年
6	気持ちのよいまちをつくる緑と水	2	オープンスペース、まとまりのある緑、庭木の緑、河川・水路沿いの緑の4つに分けて、まちの緑と水についてまとめた。	町中には多種多様な緑が豊富に見られるが、十分に活かされていない。どう活かしていくかが今後の課題である。	98年3月	「第3学区のまちづくりを考える会」で得られた住民の声の情報を総合した。	97年
7	大道堰の歴史	2	市内を北東に流れる灌漑用水路である大道堰の沿革・歴史について紹介した。	急激な宅地化が進み灌漑用水路としての役割が少なくなった。水質も徐々に悪化し、生き物が棲みつけない環境となっている。	98年3月	「第3学区のまちづくりを考える会」で得られた情報と、大学研究室の独自のインタビュー調査と資料調査の結果とあわせてまとめた。	97年
8	様々な場所をつなぐ大道堰	2	現在の大道堰の魅力と問題点をまとめた。	農業用水路から住宅地を流れる堰へとその姿は大きく変わったが、沿線には魅力的なオープンスペースが見られ、堰はこれらをつなげる可能性を持っている。	98年3月		
9	大道堰の使われ方今昔	2	昔から現在に至るまでの堰の使われ方をまとめた。	生活スタイルの変化により、堰の持っていた生活に密着した美しさが失われつつある。新たな生活スタイルと結びついた堰の役割を考える必要がある。	98年3月		
10	都市の拡大を探る	2	都市全体のバランスを見るために、都市の拡大過程を分析し、今後の課題をまとめた。	今後人口が増加する見込みはなく、市街地周辺を開発していくより旧市街地内で計画的に開発を進め、都市の規模を維持していく必要がある。	98年10月	大学研究室で自主研究として行った分析から得られた情報をまとめた。	98年
11	人口のバランスを考える	2	人口の空洞化、高齢化の現状を地域毎に把握し、これによって生じる問題点をまとめた。	同心円状に人口減少、世帯数の減少、高齢化の地域が広がり、地域間の人口のバランスに偏りが生まれ、生活の重心を変えている。	98年10月		
12	光'カザン'のまちづくりを考える／光'カザン'とは？	2	官庁街地区「シビックゾーン」のまちづくりの問題、居住の現状、都市計画の中での位置づけを整理、紹介した。	中心市街地の各地区の「楔」の位置にあたるシビックゾーンが、各地区を連続性をもってどうつなげるか、その風格をどのように活かすかが課題である。	00年3月	大学研究室で行った分析と、99年に開催された「シビックゾーンのまちづくりワークショップ ^{注7)} 」で得られた情報を総合した。	99年
13	光'カザン'のまちづくりを考える／光'カザン'のあゆみ	2	シビックゾーンの歴史を江戸期、大正～昭和初期、昭和後期、現在の4段階に分けて紹介した。	安定した地盤であり一貫して行政機能がおかれてきた。古い官庁施設の意向と現在の官庁施設が同居しており「歴史の重層性」が感じられる地区である。	00年3月		
14	光'カザン'のまちづくりを考える／光'カザン'のこれから	6	「シビックゾーンのまちづくりワークショップ」で議論した、地区全体の整備イメージ、2つの通りを中心とした将来イメージを紹介した。	千歳橋筋は参加者のイメージがまとまらず、食い違う意見も多くあった。みゆき通りは旧大手道という歴史的な背景ががかりとなりイメージが共有された。	00年3月	99年に開催された「シビックゾーンのまちづくりワークショップ」で得られた情報をまとめた。	99年
15	光'カザン'のまちづくりを考える／今後のまちづくり	2	シビックゾーンの今後の整備について、ワークショップでの議論を総括した。	シビックゾーンのイメージを作ることは簡単ではないが、共通認識も少なくない。継続的に市民自身で議論していくことが重要である。	00年3月		
16	都市のにぎわいを楽しむ	2	中心市街地で行われている市「ナイトバザール」の実態を明らかにし、活性化の視点からどのような可能性があるかをまとめた。	画一的でない雑然さがナイトバザールの強みになっている。「商店街としての」ではなく「鶴岡のナイトバザール」として展開することが望まれる。	02年2月	大学研究室で自主研究として行ったナイトバザール出店者へのアンケート調査、来街者へのインタビュー調査の結果をまとめた。	01年
17	あるいて楽しむ都市空間	2	実験的に車両通行止めにして行われた「ナイトバザール」時の空間の使われ方を分析した。	車両通行止めにより、人々がまちを自由に歩いて買い物を楽しむことができ、車道を広く使った店舗、表現活動が出来るようになった。	02年2月		
18	道路交通システムの現状	2	中心市街地の道路交通システムの現状を明らかにし、今後のありかたについて考えた。	現状では歩行回遊を楽しむことが出来ない。市民の意識を変えつつ、ビジョンと戦略に基づいて道路交通システム形成を行う必要がある。	02年2月	大学研究室で行った、駐車場の実態調査、歩行回遊の実態調査の結果をまとめた。	00年
19	駐車回遊型の交通社会実験	4	交通社会実験の結果を、パークアンドバスライドシステムの利用、商業活動への影響、市民意識の変化の3点から分析した。	交通混雑もなく、滞在時間の増加、回遊性の向上、市民意識の向上が実証された。今後は地域で一体となって実験を継続していく必要がある。	02年2月	大学研究室で行った、交通社会実験の結果の分析をまとめた。	01年

No.	タイトル	ページ数	概要	論旨	発行時期	情報帳作成のための議論や調査	実施年
						概要	
20	多様な居住の可能性を探る 1	2	中心市街地再生の課題となる定住人口の回復について、住民移動のデータから実態と可能性についてまとめた。	中心市街地に生涯定住するというニーズは多く見られないが、①転勤者向け住宅ニーズ、②一戸建て購入前ニーズ、③高齢者世帯ニーズが見いだされた。	02年 2月	「元気居住都心構想ワークショップ ^{注8)} 」で得られた情報と、大学研究室で行った都心居住実態調査の結果の分析をまとめた。	01年
21	多様な居住の可能性を探る 2	2	東京在住鶴岡出身者の中心市街地へのUターン居住の可能性についてまとめた。	短中期的には鶴岡での居住を希望する意向が多く、具体的なスタイル、必要な機能・サービスが明らかになった。	02年 2月		01年
22	まちなか観光の可能性	2	中心市街地活性化の一つの方向性として取り組まれている「まちなか観光」の考え方と、実験的に取り組まれた「つるおか街かど文学館」の活動を紹介した。	市民運営による小空間は、単なる施設ではなく、新しいコミュニケーションの場となる。今後も、市民活動が常に生み出される環境づくりが大切になる。	02年 2月	「歩いて暮らせるまちづくりワークショップ ^{注9)} 」で得られた情報と、「つるおか街かど文学館 ^{注10)} 」の活動をまとめた。	00年 ～ 01年
23	中心市街地の空間を読む	2	城下町時代の複雑な道路空間が残る中心市街地で、どのように都市空間が変化してきたかをまとめた。	鶴岡には複雑な道路空間が残されており、このことは思いがけない面白い空間が生まれる可能性につながる。	02年 2月		99年
24	中心市街地の空間の移り変わり	2	戦後の中心商店街の空間構成の変遷の実態をまとめた。	個人によるばらばらな空間更新は、街全体としての魅力的な商業空間形成につながっていない。個人の建て替えと全体のビジョンが連動するまちづくりのシナリオが必要である。	02年 2月	大学研究室で行った分析と、住民インタビュー調査で得られた情報を総合した。	99年
25	中心市街地をデザインする	2	商業者が参加した「立体建替えデザインゲーム」の結果と、このゲームを通して見えてきた中心市街地の将来の姿をまとめた。	現段階では夢に過ぎないアイデアだが、今後個別の建替えにあわせてアイデアを少しずつ実現していくことにより、まち全体で素晴らしい空間を生み出すことができる。	02年 2月	「立体建替えデザインゲーム ^{注11)} 」で得られた情報をまとめた。	99年

図2 まちづくり情報帳の紙面の構成 (no.2 山の景観を楽しむ の例)

(2) 調査の方法

調査の対象としたのは、情報帳を配布した先として鶴岡市都市計画課が把握している216名である。調査票は、鶴岡市都市計画課の名義で、no.16～25の情報帳の送付にあわせて配布した。2002年3月11日に郵送で配布し、郵送・FAXによる回収、窓口における直接回収を行った。85通を回収し、うち有効回答数は69通、回収率は31.9%であった。回答者の年齢、性別は図3に示す通りである。

(3) 分析のフレーム

分析にあたって、まず個人がまちづくりに取り組む姿勢を5タイプに類型した。まちづくりは多様な姿勢の人物が関係し、関わり方や評価はその中から形成されるからである。

類型化は、「問題意識」と「関わり方」の軸により行った。「関わり方」については、行政に対して意見を述べたいタイプ（参加型）と、自らがまちづくりを実践するタイプ（協働型）の二つを両端におく「行政との関わりかた」の軸を設定する。情報帳に対しては前者は例えば読者としての、後者は制作者としての関わり方が想定さ

れる。「問題意識」の軸については、教育や書籍など外部の情報からまちづくりの問題意識を形成したタイプと、身近な環境の不備から問題意識を形成したタイプの二つを両端におく「問題意識の形成のされかた」の軸を設定する。情報帳に対しては前者は例えば城下町の歴史などをまとめた内容を、後者は例えば地図上に苦情をまとめた内容を好むことが想定される。

一方で、この2軸はまちづくりを公益的な立場から取り組むことを前提としているが、自らの財産がまちづくりの課題と直接関係する場合、私益的な立場も持ちうる。この場合2軸に加えて、「財産に関わるかどうか」がもう一つの軸として示される。財産に関わる場合は「参加」や「協働」といった公益的立場は取りにくくなり、かつ問題意識よりも財産に関する意識が優先することが起こりうる。そのため、先に示した2軸は、「財産に関わらない」というタイプに適用される。

以上まとめると、図4に示すとおり個人がまちづくりに取り組む姿勢が類型化される。タイプ①は都市計画道路の拡幅で存亡の危機に立たされている商店主（以下「地権者型」）、タイプ②は生涯学習としてまちづくりに取り組む市民（以下「生涯学習型」）、タイプ③は苦情を陳情する町内会長（以下「苦情型」）、タイプ④は住環境向上のために行政と相談しながら建築協定締結に取り組む市民（以下「建築協定型」）、タイプ⑤は専門的な能力を持つまちづくりNPOのスタッフ（以下「NPO型」）などが例示される。

一人の人物が局面に応じてこれらの姿勢を使い分けることは十分にあり、優れたまちづくりのリーダーであるほど、これらの姿勢を多く併せ持っているとも言える。したがって、5つのタイプの組み合わせによって類型化の方がより正確であるが、サンプル数を考慮して、アンケートに図5に示すa.～c.の質問を設け、その回答により、市民を5つのタイプに区別した。

（4）各タイプ毎の評価

まず、問題意識の一致を見る。図6に示すe.～h.の4つの評価項目を示し、それぞれ「まとまっていない（得点1）」「まとまっている（得点2）」「大変よくまとまっている（得点3）」の3段階の評価を得た。図6は、各タイプ毎の評点の平均値と全体の平均値を示したものである。

全体平均を見ると、4項目の評価にあまりばらつきが無いが、項目f.g.がやや高い評点となっている。情報帳が専門的な「解釈」をまとめたものであり、市民の意見を広くまとめたものを志向したものではないことが反映されたと考えられる。タイプ毎に見ると、地権者型と生涯学習型はほぼ全体平均と重なっており、生涯学習型がやや全体的に高い評点となっている。建築協定型は、全項目において最も高い評点である。苦情型は評点が極端に低く、特に項目e.h.の評点が低い。その理由としては、情報帳が個別的な苦情や、市民の声を広く浅く取り上げるような内容となっていないためであると考えられる。NPO型は、項目g.f.h.の項目が全体平均に近いのに対し、項目e.の評点が低い。その理由は様々考えられるが、肯定的に見ればそもそもNPO型がe.の情報よりg.の情報を欲していること、否定的に見れば情報帳には筆者ら外部の専門家の主張が多く盛り込まれているため「高い専門性は有するが、市民の意見をまとめたわけではない」という反発と考えられる。

次いで、関わり方の一致を見る。図7に示すi.～l.の4項目を示

図3 アンケート回答者の年齢・性別

図4 まちづくりに取り組む姿勢の類型

図5 類型の区別方法

図6 問題意識の一致

図7 関わり方の一致

し、各項目への関わり方の度合いを図7下部に示す選択肢の通り調査した。

項目i.に対しては、全体で40%近くが「自宅でじっくりと読む」以上の関わり方を答えたのに対し、苦情型と地権者型の多くが「ばらばらと見る」程度であることが特筆される。項目j.とi.への評点は似ており、比率こそ異なれ、タイプ毎の評定の相対的な関係は両項目で変わらない。しかし地権者型の項目j.を見ると、「実際に参加したことがある」という関わり方が増大している。「手元に届いた時には読まないが、学習会には参加する」という関わり方が読みとれ、その理由としては、地権者型の抱える危機感が対人的なコミュニケーションを必要としていることが考えられる。

項目k.l.はj.がどちらかといえば受動的な関わり方であるのに対し、能動的な関わり方である。そのため「考えたことがない」という関わり方が全体として増大している。しかし、NPO型を見ると、項目k.l.ともに、60%以上が「企画してみたい、制作してみたい」以上の関わり方を答えている。次いで能動的なのは建築協定型、地権者型であるが、項目l.についてはあまり能動的ではない。

苦情型、生涯学習型は項目k.l.ともに能動的ではない。苦情型が全項目を通じて能動的ではないのに対し、生涯学習型は項目i.j.で示された関わり方と対照的な結果となった。「学習は好きだが、自らが学習の場を仕掛ける側にはならない」という関わり方と言える。

以上、情報帳に対する各タイプ毎の評価をまとめる。まず、苦情型については、問題意識と情報帳でまとめられた課題がずれており、内容も殆ど読まれておらず「関わり方」そのものが形成されていない。地権者型と生涯学習型の問題意識と課題はあまりずれておらず、「学習会を企画する」「情報帳を制作する」といった関わり方は地権者型に少し見られるものの、どちらかというと「学習会に参加する」関わり方が多い。生涯学習型は情報帳をじっくりと読むが、地権者型は読まず、地権者型に対して学習会などの施策を充実させることが、情報帳の有効性を高めることにつながる。建築協定型とNPO型は全体的に能動的な関わり方を志向しており、NPO型が特にその傾向が強い。問題意識と課題のずれを見ると、NPO型は多少ずれが見られるが、建築協定型は最もずれが少ない。

5 結語

本報告では、「まちづくり情報帳」の作成の考え方と技術を報告し、市民の評価を調査した。情報帳の特徴は「問題意識の広がり」

と「関わり方の広がり」を前提としたところにあるが、市民の評価を見ると、5タイプのそれぞれの傾向が明らかになった。問題意識とうまく一致し、読み手層となっているのは生涯学習型、建築協定型、NPO型であり、学習会が組み合わされることによってそこに地権者型が加わる。これらのうち建築協定型、NPO型は情報帳の企画、制作側に回りたいという積極的な関わり方も志向している。苦情型の問題意識には対応出来ておらず読まれてもいない。実際のまちづくりの現場では、建築協定型、NPO型の人材を中心に据えて、苦情型の意向をうまく受けとめつつ、生涯学習を通じて人材を育成し、地権者の協力を引き出す、といった形で、5タイプの市民の役割を組み合わせることが求められる。今後は情報帳をさらに活用して、市民の中に新たな関係性を創出することが望まれる。

＜謝辞＞本取り組みにご協力いただきました、鶴岡市民の皆様、建設省酒田工事事務所に記して感謝の意を表します。

＜注＞

- 1) 例えば、高知市コミュニティカルテ (1974) など。文献 (1) (2) に詳しい。
- 2) 例えば、真鶴町美の基準 (1994) など。文献 (3) に詳しい。
- 3) 例えば、まちづくりブック伊勢 (2000) / 文献 (4) など。
- 4) 例えば、飛騨古川のタウトレイル (1992) など。文献 (5) に詳しい。
- 5) 例えば、くすのきは見ていた一鏡町もやい物語 (1990) など。文献 (6) に詳しい。
- 6) 第三学区住民約30名 (全て公募・自由参加) が参加し、4回開催された。鶴岡市全体のまちづくり、第三学区全体のまちづくり、鶴岡公園と街路整備事業、大道館の課題、活用といった課題についてまち歩きなどを組み合わせて議論した。
- 7) 中心市街地の官庁街 (シビックゾーン) のまちづくりについて市民に周知し、意見を聴取するために市民16名、行政職員9名が参加 (固定メンバー/公募無し) し、まちあるき、デザインゲームなどを組み合わせて5回にわたり議論した。
- 8) 市民約50名 (全て公募・自由参加) が参加し、5回開催された。中心市街地における高齢者居住の可能性について議論した。
- 9) 市民約36名 (全て公募・自由参加) が参加し、2回開催された。中心市街地の活性化について議論した。
- 10) NPO法人庄内市民活動センターが事務局を担い、藤沢周平他の文学者の情報センターの設立を実験的に仕掛ける活動。9) のワークショップをきっかけに設立された。
- 11) 商店主約30名が参加し、13回開催された。模型を用いて代替えを体験するゲームを通じて、まちの将来像を議論した。

＜参考文献＞

- (1) 川名吉工門、高見沢邦郎：コミュニティ計画、C.P.I. 1974
- (2) 森村道美：マスタープランと地区環境整備、学芸出版社、1998
- (3) 五十嵐敬喜、野口和雄、池上修一：美の条例、学芸出版社、1994
- (4) まちづくりブック伊勢制作委員会：まちづくりブック伊勢、学芸出版社、2000
- (5) 西村幸夫：住民参加によるまちづくりへのタウトレイル手法の適用に関する研究、住宅総合研究財団研究年報、pp219～pp226、1992
- (6) 倉原宗孝・延藤安弘：住民による環境絵本創作におけるまちづくり意識の高揚に関する考察、日本都市計画学会学術研究論文集、pp553～pp558、1990

[2002年4月19日原稿受理 2002年7月23日採用決定]